

# スタンドアップ

2006(平成18)年1月14日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝ニキ・カーロ／出演＝シャーリーズ・セロン／エル・ピーターソン／トーマス・カーティス／フランシス・マクドーマンド／ショーン・ビーン／ウディ・ハレルソン／ジェレミー・レナー／リチャード・ジェンキンス／シシー・スペイセク／ジェイムズ・カーダ／ラスティ・シュウイマー／ミシェル・モナハン（ワーナー・ブラザーズ映画配給／2005年アメリカ映画／124分）

……ハリウッドビューティ―を代表するシャーリーズ・セロンが『モンスター』（03年）に続いて、汚れ役に挑戦。時代は1989年、舞台は凍てつく北ミネソタの鉱山。そしてテーマは女性差別とセクハラ……。日本がバブルで浮かれていたあの時代、アメリカの鉱山という「男の職場」でこんなすさまじい差別があり、そこから「スタンドアップ」した女性たちがいたことに感動。弁護士を兼ねる映画評論家（？）として、「クラス・アクション」の解説にも寄与して、この映画の意義をアピールしなければ……。

## 第4章

いろいろな勉強になります

### アカデミー賞女優と女性監督によるすべての女性に捧げる映画！

この映画は、体重を10kg増やし、醜女メイクを施して世間をアツと言わせた『モンスター』（03年）で見事アカデミー賞主演女優賞を獲得した、ハリウッドビューティ―のシャーリーズ・セロンが、再度「汚れ役」に挑戦したもの。

他方この映画を監督したのは、『クジラの島の少女』（02年）の女性監督のニキ・カーロ。この『クジラの島の少女』のケイシャ・キャッスル＝ヒューズは『モンスター』のシャーリーズ・セロンとアカデミー賞主演女優賞を競った作品。そんな2人の女性が組んですべての女性に捧げるべく、「男の職場」の中で、差別、いじめ、セクハラで苦しむ女性たちの「立ち上がる」姿を感動的に描いたのがこの映画。

パンフレットに印象的な解説を載せている見城美枝子氏の表現を借りれば、

「現象」で生きている男の私はああなるほどと感心するだけだが、「実体」で生きている女のあなたは、そのすごさを体験できるはず……。

## 2つのタイトルを考える

この映画の邦題は『スタンドアップ』。「立ち上がれ」と訳されるこの英語の意味は、次第に緊張感を増していく後半のクライマックス場面で、「なるほど」とヒザを打つはず。しかし、原題は『North Country (ノースカントリー)』で、これはこの映画の舞台となっているアメリカのミネソタ州北部のまちをイメージしたもの。私は知らなかったがアメリカの中西部にあるミネソタ州は、凍てつくような寒い冬がその特徴とのこと。

今年の冬、日本の北越・山陰地方はまれにみる豪雪に襲われているが、この映画も雪のシーンがいっぱい。パンフレットによると、舞台となった「アイアン・レンジ地方はごく最近、記録破りの寒さに見舞われたが、キャストとスタッフが到着した時には、ありがたいことに気温は零下7度近くまで「上がって」いた」とのこと。大阪でこの映画を観るのはいいが、雪の被害で大変な目にあっている地方では、『North Country (ノースカントリー)』というタイトルのこの映画はちょっと……。

## 訴訟によるサクセスストーリーのモデルは……？

この映画のモデルとなったのは、1998年に終結したエベレス鉈山 VS ルイス・ジョンソン裁判。これはセクシャル・ハラスメント法制定に寄与した画期的な判例だと言われているもの。

映画の中では、女性差別に対して立ち上がり「訴訟提起」をした主人公ジョージ・エイムズ（シャーリーズ・セロン）が、さまざまな試練を乗り越えて最終的に「成功」というストーリーとして描かれている（和解によって多額の賠償金を勝ちとった……）。

そこで思い出すのは、あのジュリア・ロバーツがアカデミー賞主演女優賞を獲得した『エリン・ブロコビッチ』（00年）。訴訟によるサクセスストーリーという意味ではたしかに共通点が……。

## 私の知らなかった「アメリカ」がいっぱい

アメリカのミネソタ州がそんなに寒いことも知らなかったが、その他にも私は、この映画の舞台である1989年というつい最近の「民主主義国」アメリカに、こんな貧困と、セクハラなどという言葉では表現できないほどの女性差別が存在していたことも知らなかった。「この映画は実話に基づいたものである」とスクリーン上に表示されるこの映画によれば、「ミネソタ州北部の鉱山で、はじめて女性が採用されたのは1975年。そして1989年でも男女比は30対1だった」とのことだ。

鉱山という特殊な職場では、それくらいの男女差別は当たり前と思うと大まちがいで、「職場を女に奪われる」という危機感を男たちが持っていることにビックリ……。したがって、露骨な女性への差別、敵視、セクハラ行為は単なる差別意識の問題ではなく、生活・収入をかけた、女が職場へ進出してくることへの本気の敵意だったわけだ。

## 1989年当時の日米比較

1989年＝昭和64年＝平成元年は、日本ではバブルが崩壊した転換期の年だが、逆に言えばそれまでの10年間、日本は「わが世の春」を謳歌していた時代。そしてそれに対応して(?)、1986年には「男女雇用機会均等法」も施行され、形の上では女性の社会進出は当然のものと受けとめられていた時代だ。

アメリカは広い国。したがって、ニューヨークやワシントンでみる「アメリカ型社会」が、地方(田舎)にも行き渡っているのかと思いがちだが、どうもそれは違うようだ。中国では、北京、大連、上海、青島、深圳などの沿岸部の都市と内陸部の都市との格差がバカでかいことは常識だが、実はアメリカでもそうだったのだ。このことについて認識を新たに、再度勉強しなければ……。

## ニキ・カーロ監督の視点は……?

そんな実話を前提として、ニキ・カーロ監督は、映画の冒頭から法廷シーンをチラホラと示しながら、過酷なジョージの人生模様を観客に紹介していく。証言台に座るジョージをイヤミな質問で執拗に迫るのは、会社から、有名な「女

性」弁護士だからという理由で雇われた弁護士。これは映画としてよくある手法だが、ニキ・カー口監督が描くジョージの生きザマと法廷シーンのバランスは絶妙……。

「セクハラ訴訟」はよほど明確な証拠がなければ、いくら裁判所に訴えても容易に認められないことは明らか。したがって、ジョージから依頼を受けたビル・ホワイト弁護士（ウディ・ハレルソン）が当初は頭からそれを受けつけず、受任しなかったのは当然。しかしそんなビルを翻意させたのは一体ナニ……？そしてジョージの熱意に歩調を合わせたかのような、ビルの熱意は何を生み出したのだろうか……？

## クラス・アクションとは？

アカデミー賞候補と謳われているこの映画についての評論は多く、『イグザミナ』2月号にも浜村淳氏の面白い評論がある。しかし、これを含めどの評論を見ても、アメリカのクラス・アクションという訴訟制度についての解説はない。そこで映画評論家兼弁護士(?)である私にしかできない解説として、以下それをひとくさり……。

## クラス・アクションの意義と日本の民事訴訟法

「集合代表訴訟」と訳されているクラス・アクション制度とは、多数の者が法律上または事実上の争点を共通とする損害賠償請求権を有する場合等に、その多数の者によって構成されるクラスを觀念し、そのクラスを代表する者が損害賠償請求訴訟を提起・追行することを認め、代表者の受けた判決の効力を有利不利を問わず、そのクラスの構成員に拡張するもの。そして、代表者が勝訴した場合には、代表者が獲得した賠償金は、クラスの構成員に分配されることとなる（インターネット情報参照）。

日本の民事訴訟は、一人当事者を原則として当事者適格や判決の効力（特に既判力）を構成しているため、多数当事者訴訟になると何かと不便な（法的に対応できない）ことが多い。私が弁護士登録した1974年当時は「大型」公害訴訟が多発していたが、千名規模の民事訴訟（特に損害賠償訴訟）を提起するには、その

原告を集め1人1人の意思確認をするだけでも大変な作業。そして、そもそも裁判所の物理的容量からして、原告本人が法廷に出席することすらできないという状況になってしまう。さらに、消費者問題が多発する中で起こった少額事件だが、それが大量の原告になると、一般の民事訴訟法の手続では対応できないことが多くなる。

## 選定当事者とは？

もっとも民事訴訟法には「選定当事者」(30条)という制度がある。これは、多数の共同利益者が共同訴訟人となるべき場合に、そのうちの1人または数人を選定し、この者に当事者として訴訟を進行させることによって、手続の煩雑化を避け、費用と労力の無駄を防ぐことを可能にし、もって訴訟を迅速化することを本条の目的とするもの。しかし、この選定当事者制度を利用するためには選定行為が必要なため、選定者に加わる用意のある者が訴訟についての情報を有しないため選定者になる機会をもたないという、この制度固有の限界がある(『基本法コンメンタール新民事訴訟法1』79頁参照)。

## 日本でクラス・アクションが採用されない理由は？

アメリカのクラス・アクション制度を日本でも採用しようという議論は私の弁護士登録直後から盛んに行われてきたが、残念ながら今でもそれは採用されていない。その導入が困難とされる理由は、現在次の3点と考えられている。すなわち、

①クラス・アクション制度においては、訴訟の提起を知らず、訴訟手続に関与していない構成員に対しても判決の効力を及ぼす前提として、手続保障の観点から、知っている構成員に対する個別の通知や公告をすることが要求されているが、このような手続上の担保を設けたとしても、憲法が保障する裁判を受ける権利を侵害するのではないかという疑念を払拭することはできないこと、

②わが国の不法行為理論においては、被害者であるクラスの構成員を特定しないままに損害賠償額を算定することや、代表者が勝訴した場合の賠償金の分配方法について、合理的な説明をすることは困難であること、

③クラス・アクション制度の導入は、手続法上の問題にとどまらず、実体法秩

序の大幅な変更を意味することとなること。

そして、クラス・アクションを求めるニーズの一部は、平成10年施行の民事訴訟法で拡充された選定当事者制度の活用によって補うことが可能であるとされている（以上、首相官邸 司法制度改革審議会ホームページ (<http://www.kantei.go.jp/jp/sihouseido/index.html>) 参照）。

## どうすればクラス・アクションになるの……？

原告が勇気を持って訴訟を提起したジョージー1人だけではクラス・アクションにならないのは当然。そこでこの映画では、「3人の原告を集めたら、クラス・アクションとして認めよう」という判断が、裁判官によって示されるところがミソ……。しかし、この言葉の意味をちゃんと法的に理解できる日本の観客は少ないはずだから、そんな人たちには私のこの評論が大いに役立つはず……？

さて、女性労働者13名の中から、クラス・アクションに立ち上がることを決意する女性は何人登場するのだろうか……？

## ジョージーはホントに「身持ちの悪い女」……？

台所に倒れている美しいジョージーの口には、血がベツトリ。そして顔にはひどい傷。どうもこれは夫婦ゲンカによるものらしいが、チトひどすぎる。さらにどうもこんなことは、しょっちゅうらしい……。こんな夫の暴力に耐えかねたジョージーが逃げ出すように、北ミネソタの町にある実家に戻ったのは当然。ジョージーは絶対夫の元には帰らないと決意していた。車に同乗した息子のサミー（トーマス・カーティス）も娘のカレン（エル・ピーターソン）も、このジョージーの気持は十分理解できていた様子。もっとも、カレンは夫との間に生まれた娘だが、実はサミーは父親が誰かわからないまま10代でジョージーがシングルマザーとなった時の子供。こりゃ大変だ……。

長年鉱山で働いている父親のハンク・エイムズ（リチャード・ジェンキンス）の、こんな娘に対する視線は厳しく、口もきいてくれない有り様だし、母親のアリス・エイムズ（シシー・スペイセク）も、辛抱して夫と仲直りしろと言うだけ……。まさに四面楚歌のジョージーだったが……。

## 鉱山で働くメリットとデメリットは？

ジョージがピアソン鉄鋼会社の鉱山で働こうと考えたのは、グローリー（フランシス・マクドーマンド）の影響によるところが大。グローリーは病気の夫のカイル（ショーン・ビーン）に代わって鉱山で働いている女性で、組合（ユニオン）の役員もしている超ベテラン。鉱山で働くことのデメリットは、過酷な労働条件プラス「女性差別」だが、メリットは通常の女性の仕事の5～6倍の給料があること。それだけの収入があれば、夫や両親から自立して子供たちを養うことができるうえ、ひょっとしたら家まで持つことができる。そう考えたジョージの決断は早く、「女が鉱山で働くなんて！」と強い拒絶反応を示す父親の反対を押し切って働くことに。

## 職場のひどさは想像以上……

この鉱山での女性差別と敵視は想像以上で、今風に言えばまさに「想定範囲外」……。男女比率30対1の職場で働く女たちが過酷な条件にあることは一般的に理解できても、この職場で行われている冷やかしたり中傷、質の悪い悪戯、卑猥な落書き、レイプの恐怖はすごいもの。それはこの映画を観てのお楽しみ(?)に……。

しかもそこには、かつてハイスクール時代のボーイフレンドであったボビー・シャープ（ジェレミー・レナー）がいたから、さらなる問題が発生することに……。それは何と、ボビーによる直接的なジョージへの暴行事件。ジョージが無惨な姿のままその「事実」を組合幹部にアピールし、ボビーの処分を求めたのは当然。しかしそれも無理なことがわかったと、ついにジョージは退職を決意。さてこれは、ジョージの敗北を意味するのだろうか……？

## 同僚の女性たちのスタンスにも注目！

差別を受け敵視されているのは鉱山で働く全女性に共通だが、女性たちの年齢や置かれた境遇はそれぞれ違うもの。そのうえ、男たちの興味はそれぞれの女性の容姿や対応の仕方にあった。したがってベテランのグローリーや、「名は体を

表す」ということわざどおりのビッグ・ベティー（ラストイー・シュウイマー）などは、男たちの性的興味の対象から外され、10代のシェリー（ミシェル・モナハン）や、子持ちながら美人のジョージに男たちの性的好奇心が集中したのは当然……？

そんな中で、分かれていくのが女性労働者たちそれぞれのスタンス。あくまで我慢しようとするスタンスからは、ジョージの問題提起はかえってややこしいもの。ヘタに手を貸して会社からにらまれたりしようものなら、かえってヤバイ。そのように自己保身的に考えるのも当然。したがって、ジョージが退職した後、1人敢然と訴訟を起こすと言っても、我慢して会社に残っているかつての同僚たちが共に立ち上がれないのはむしろ当然。同じ仲間であるはずの女同士でさえ、こんな有り様だ。こんな八方塞がりの状況下、ジョージの闘う意欲はなお続くのだろうか……？

### 一見、もの分かりの良さそうな社長だったが……？

ピアソン鉄鋼会社の社長はドン・ピアソン（ジェイムス・カーダ）だが、この映画におけるピアソン社長とジョージとの「出会い」が面白い。ジョージにとってピアソン社長は「雲の上の人」だから、その顔も知らないのは当然。ところがなぜかピアソン社長は、たまたまレストランで出会ったジョージを覚えていたばかりか、わざわざその席に足を運んで挨拶。そして「相談したいことがあればいつでも言ってきなさい」とやさしい言葉を。これはひょっとしてピアソン社長もジョージが美人だから印象に残っていたのかナ……？

それはともかくジョージがこれに感激したのは当然。職場で抗議をする時も、ジョージがピアソン社長の名前を持ち出して「直接社長に相談に行くわよ！」と脅すとそれなりの効果も……。そこでボビーによる直接的な暴行に対して敢然と立ち上がったジョージは、ある日1人社長の元へ乗り込んだが……。その顛末は映画を観てしっかりと確認してほしいもの……。

### ビル弁護士の尋問はちと強引だったが……？

前半はチラホラだった法廷シーンのウエイトが、後半はずっと大きくなる。ク

ラス・アクションにするためにジョージはビル弁護士とともに闘っているが、どうも旗色が悪そう。だってみんなが見守る法廷で、ジョージは息子サミーの父親が誰だかわからないなどと過去のキズを暴き立てられているのだから。さらに決定的ダメージを与えるべく登場したのが、学校時代にジョージをレイプした教師と、それを知りながらその場から逃げてしまったボーイフレンドのボビー。この教師はあくまでジョージから誘われたと証言し、ボビーもそれを否定しなかったから、もはやジョージの敗北は明らか……？

そんな状況下、決死の反対尋問に臨んだビル弁護士は、裁判官の制止も無視して、切っ先鋭くボビーの良心に訴える尋問を次々と……。矢継ぎ早の迫力ある尋問にタジタジとなったボビーは、ついに「あれはレイプだった」と証言。これによって裁判の流れは大きく転換していくことに。しかし自分がレイプ犯との間の子供であることを知らされた息子のサミーは大丈夫……？

## 母と息子との絆は？

この映画は女性監督特有の視点で、ジョージと2人の子供たち、とりわけ息子サミーとの心の交流を見事に描いている。サミーは日本で言えば中学3年生くらいと思われるが、この年頃の男の子が反抗期になるのは当然だし、自分の父親が誰かわからないと言われていうえ、再婚した父親とも再度別れてしまった母親に対して、いい印象を持っていないのは当然。しかし、母親が地元の人たちから「身持ちの悪い女」「アバズレ」と言われていることを知ると、彼は何とそれを自分の口からも……。これはちょっとひどすぎる……？

ジョージが一生懸命に母親として接しようとしていることはよく理解できるが、そうかといって特別の知恵や工夫が示されるわけではない……。だって、ガールフレンドの家に泊まると言ってきたサミーに対してジョージがとった行動などは、決して誉められるものではないはず……？

そんなバラバラな3人の心が1つになったのは、はじめてジョージが稼いだ金で「まともな店」で3人で食事をした時。このシーンにおける、心の安らぎを得たうえ誇りに満ちたシャーリーズ・セロンの表情は絶品……。そして、こういう演技を引き出したニキ・カーロ監督の手腕にも脱帽……。

しかし、自分の父親がレイプ犯であることを知ったサミーの心の痛手は想像を絶するもの。果たしてサミーは、ジョージの元へ戻ってくるのだろうか？ そして、母と息子の絆を取り戻すことはできるのだろうか？ そこらあたりは、この映画をじっくりと鑑賞してもらいたいものだ。

## ハイライトはやはりアメリカ的民主主義……？

この映画ではユニオン（労働組合）が微妙な立場で、ジョージの味方なのかそれとも敵なのかの判断が微妙なところ……。この映画のハイライトは、終盤のユニオン・ホールでの組合員集会。ただ1人立ち上がって訴訟を闘っているジョージは、今は退職しているため本来組合員ではないはず（？）だが、どうしても発言したいとジョージはメモを片手に壇上を目指した。もちろん会場からはこれを罵倒する野次が飛び、議長もその登壇を拒否。しかしそれでも引き下がらないのがジョージ。1人壇上に立ち、話しはじめたそのスピーチとは……？

そしてその姿を見て遂に立ち上がったのが、同じ会場にいた父親のハンク。壇上に上がったハンクの父親としての発言は、まさに魂の叫びともいべき名スピーチ。こんなシーンを観ていると、やはりアメリカは言論の国、そして民主主義の国という感を強くするのだが……。

## 日本人にはちょっと難しすぎ……？

私はこの映画を公開初日の土曜日に観たが、一昨年のアカデミー賞主演女優賞のシャーリーズ・セロン主演の映画にもかかわらず、私の予想に反して、観客席は30～50名程度とガラガラ……。これは一体どういうこと……？

それは前宣伝が不十分なことと、美しいシャーリーズ・セロンのポスターではなく、醜女メイクをしたシャーリーズ・セロンのポスターを「売り」に使っていたため……。そして私なりに感じた観客不入りの理由は、この映画はやはり日本人の観客には少し難しすぎるのではということ。そんなレベルの低い日本人観客（？）に、少しでも私のこの映画評論を読んでもらい、映画を観て勉強することの楽しさを知ってもらいたいものだが……。

2006(平成18)年1月16日記